
連体修飾構造における主格助詞「の」の変化

中古語と現代語との比較

金 銀 珠

1. はじめに

言語テキストにおける単語と文は、コンテキストが意味の生成に関与する文章とは違い、受信者にとって共通の意味を表す。作成者が意図する事態群と受信者が理解する事態群が同一であることが、テキストが果たすべき最も重要な機能であるとするならば¹⁾、言語テキストにおいて誰にとっても同じ意味を表すべき文を構成する語や形態素の統合と配列の規則を解明することは、テキストの意味生成のプロセスを解明する作業において基本的であるといえる。

本稿は、日本語テキスト構造の連体修飾節において主語を表す助詞として「の」が選択される理由について、通時的な観点から「の」の歴史的展開とその言語内的要因を解明することへの将来的展望を得ようとする。以下ではその手始めとして、連体修飾構造における主格助詞「の」がどのように変化してきたのか、中古語と現代語の連体修飾構造における「の」を比較し考察する。

2. 問題の所在

現代語の連体修飾節（以下、連体節と略）においては「髪の毛長い女」「髪が長い女」のように主語を表示する「の」「が」の2種類の助詞が使用されることが知られている。現代語の一般的な主語表示は「が」が担当するが、連体節に限っては「の」で主語を表示することができる。このような連体節において主語を表す「の」は、例(1)のように既に古代日本語から存在している。ただし、古代日本語では、助詞「の」は現代語と違って例(2)~(4)でみるように用言の連体形がそのまま名詞句として用いられる準体節や接続節、主節においても主語を表すことができる。

- (1) 月のをかき夜、忍びたる所に、(源氏物語・若紫)
- (2) それだに人のあまた知らむはいかがあらん、(源氏物語・帚木)
- (3) 空のうち曇りて、風冷やかなるに、いといたくながめたまひて、(源氏物語・夕顔)
- (4) かかる所には、いかでか、しばしも幼き人の過ぐしたまはむ。(源氏物語・若紫)

「の」は現代語では例(2)～(4)のような節で主語を表す機能は失ってしまい、(1)のような連体節においてだけ主語を表すことができる。なぜ、連体節における「の」だけが主格助詞として生き残ったのか、これについては「の」が歴史的推移の線上にあり、通時的な側面からその背景を考える必要がある。この作業は、おそらく現代語における主格助詞「の」の共時的研究にも還元できる。主格助詞「の」の歴史的な研究と関連しては、助詞「の」は助詞「が」が主語表示の助詞として勢力を拡大していく変化の推移からすると、「が」の勢力拡大の様子が注目され、「の」の変化自体に光を当てることは少なかったように見られる²⁾。また、「の」は例(2)のような準体法の研究の中に収められてきた側面がある。例えば、中古語の準体法における規則としてつとに知られる石垣(1955)の「作用性用言反撥の法則」(3節詳述)の名詞句は「しろき鳥のはしとあしとあかき、しぎの大きさなる、水の上にあそびつゝ」(伊勢物語)のような「の」が介入している用例を対象としており、「の」に関する観察という側面を持っている。準体法はその性質と消滅が日本語研究の主なテーマの一つであり、「の」が準体法研究の中に限定されてきたことは、連体節や接続節等、他の主語を表示する例との総合的な考察を妨げる要因を提供してきたといえる。

以下では、従来の研究におけるこのような「の」の扱い方の反省にたち、特に連体修飾構造(以下、連体構造と略)の中で主語を表す「の」に注目し、主格助詞「の」が連体構造という体系の中でどのように変化してきたのかについて考察する。考察の方法は、中古語の連体構造における主格助詞「の」と現代語の連体節における主格助詞「の」の意味的構文的特徴を比較する。時間的差がある両言語の比較は近接した時代の考察より、全体的な変化の輪郭が明瞭に眺望できるというメリットがある。また、現代語の連体節において主格助詞「の」が現れる現象の歴史的背景について、見通しとしての可能性を示しておく。

3. 中古語の連体構造における主格助詞「の」

中古語の連体構造において主語を表す「の」は先の例(1)のような連体節の構造で用いられる。また、中古語の連体構造を担う表現には、連体節と深い関りを持つ先の例(2)のような準体節の表現がある。準体節は中古語においては連体節と共に連体構造を担っている。例えば、「赤い紙の色深き」「人のあまた知らむ」のような準体節の表現は、

「色の深き赤い紙」「人のあまた知らむこと」のような連体節の表現に対応できる。以下では、連体と準体の表現が主格助詞「の」が用いられる連体構造の中でどのような相関関係を成しているのか、連体節における「の」と準体節における「の」の意味役割分担に注目して考察する。考察は、中古語の文学テキストから主格助詞「の」が用いられる連体節と準体節の用例を抽出し、節内の述語と主名詞の各部分に見られる傾向を観察する。文学テキスト資料は、源氏物語、宇津保物語、落窪物語、竹取物語による³⁾。なお、歌の中に見られる用例は特殊な比喻表現等も混在しており対象外とし、「夜更くことの心もとなさ」（源氏1-195）のような形容詞にサ形が接続し名詞化する例と「かぐや姫のいはく」（竹取55）のようなク語法は述語が名詞に相当すると考え、対象外とする。

また、連体節と準体節を比較するため、両者を連体構造の違いによって「内の関係」と「外の関係」（寺村1975-1978）に分ける。寺村（1975-1978）によれば、日本語の連体構造は、修飾部と主名詞との間に格関係が成立する「内の関係」と、そのような関係が成立しない「外の関係」に分類される。以下でみるように、準体節には「形状性名詞句」と「作用性名詞句」と呼ばれる性質を異にする二種類の名詞句が存在することが知られている（石垣1955）。これは、現代語文法の分け方では、「内の関係」と「外の関係」に対応し、この分け方は連体節と比較する際に有効であると思われる。

準体は現象的には例(5)、(6)のように連体の主名詞が存在しない形である。

(5) [X の Y] (φ)

(6) [継ぎの布 (X) の わわけたる (Y)] (φ) (宇津保1-539)

(7) a. 田舎の人の徳ある、絹五十まるらせたれば、(落窪225)

b. みちのくに紙の厚肥えたるに、匂ひばかりは探うしめたまへり。(源氏1-372)

(8) a. 鳥のふつつかに鳴くを聞きたまひて、(源氏1-261)

b. わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを。(源氏1-246)

例(6)は現代語では「つぎはぎの服で破れているモノ」のように訳すことができるが、モノの位置にある主名詞は存在しない。準体節は名詞句と述語句との意味関係により、さらに二種類に細分されることが知られている。まず、(7) a、bのように顕在しない主名詞にヒトやモノが想定される「形状性名詞句」である。(7) aは「の」で繋がれる名詞句「田舎の人」と述語句「徳ある」の間に主述関係が認められる。また、意味的に「徳ある田舎の人」のように言うことができ、顕在しない主名詞は意味上主語名詞句「田舎の人」がこれに相当する。したがって、準体部「徳ある」に対する主語名詞「田舎の人」の関係は、連体構造では「内の関係」に相当する。(7) bは、顕在しない主名詞に「みちのくに紙」というモノが該当する例である。(7) a、bは、主語名詞句と述語句がいわゆる同格の関係を構成するものである。以下、このような準体節を同格節と称する⁴⁾。次に、

(8) a、bのように顕在しない主名詞にノ（又はコト）が想定される「作用性名詞句」がある。(8) aは「の」で繋がれる「鳥」と「ふつつかに鳴く」の間に主述関係が認められ、顕在しない主名詞に「鳥がふつつかに鳴くノを」のように現代語訳では補文標識ノの介入が想定される。(8) bは「わが身がかくいたづらに沈めるコトだに」のように補文標識コトの介入が想定される。よって、(8) a、bの顕在しない主名詞の準体部に対する関係は「外の関係」に相当する。以下、このような準体節を内容節と称する。ただし、準体節の場合は主名詞が存在せず、解釈が文脈に依存するため、「内の関係」か「外の関係」か判別しにくい場合がある。このような例は、以下の議論の対象外とする⁵⁾。連体節は「中将の住みたまひし西の対のつま」（内の関係）、「月のをかしきほど」（外の関係）のように主名詞が存在し、内の関係と外の関係の区別は比較的容易である。

3.1 述語部の特徴

まず、述語部の特徴についてみる。準体法同格節は、石垣（1955）において「形状性名詞句」と名づけられ、節内部の述語用言が主に助動詞の種類からみて「状態性」を持つ語類が来ることが指摘されている。また、内容節は「作用性名詞句」と名付けられ、節内部の述語用言は特に状態性のような性質に関らず分布することが観察されている。石垣（1955）の議論は既に青木（1956）でも問題にしているように、状態性を助動詞部分で判断しながら、ほとんどの助動詞が状態性のものとされる妥当な根拠が示されておらず、状態性を基準にする場合、述語用言の語性と助動詞の部分の性質は分けて考える必要がある。本節では、連体節と準体節内の述語に見られる特徴を語の性質と助動詞の種類にそれぞれ分けて考察する。

3.1.1 語のタイプによる分布

まず、述語用言の語性による違いは語のタイプにより形容詞（形容動詞を含む⁶⁾）、自動詞、他動詞に分け、自動詞はさらに性質が異なる非対格自動詞と非能格自動詞に分ける。移動動詞（参ル・帰ルのような動作主がある場合）も自動詞の中から細分したが、これは移動動詞が非対格自動詞といわれる一方で、動作主があるという特殊な性格を備えていると考えられるためである。また、感情感覚を表す動詞は自動詞と他動詞の両方の性質を持つ場合があるため、別に設定する。

表1は内の関係と外の関係に分けた連体節と準体節内の述語の分布を語のタイプ別に示したものである。全体的な分布は、連体節、準体節共に外の関係が内の関係の連体構造より多い。表1の語類は「状態性」の観点から、大きく二つのグループに分けられる。まず、動作主を持たない形容詞、非対格自動詞が一つのグループで、これをA類とする。また、動作主を持つ移動動詞と非能格自動詞、他動詞を一つのグループにまとめ、これをB類とする。状態性を形容詞が持つような時間軸上における行為と変化がない性質とみなすと、状態性を図る尺度としては動作主の有無、対象物の変化⁷⁾、時間軸における

展開、のような点を設定することができる。この中で対象物の変化は、影山（2001: 8）によると、「通常、変化は何らかの結果を伴うから、〈変化〉は〈状態〉と連動することが多い」とし、「変化」は「状態」と近い関係にあるという（3.2節詳述）。したがって、状態性を図る最も重要な要素は動作主の有無であろうと考えられる。感情感覚を表す動詞は、心的という点では状態性を持つといえるが、その活動が心的動作であるという点では動作主の性質を備えているといえ、その位置づけが難しい。

感情感覚を表す動詞を除き、表1の結果を動作主がないA類と動作主があるB類にまとめて再度示すと、表2のようになる。表2では二つの著しい傾向が観察される。まず、全般的にみて動作主を持たない形容詞、非対格自動詞のA類が動作主を持つ語類のB類より全体的に多く用いられる中で、内の関係にある連体節にだけ、「人の奉れるもの」（宇津保1-194）、「女君ののたまひしこと」（宇津保1-212）のような他動詞を中心としたB類が多く用いられている点が挙げられる。これは、内の関係という連体構造そのものによる現象であるとは考えにくい。同じく内の関係にある準体節の場合はA類がB類よりはるかに多く、同様の傾向が観察されないためである。この現象には、3.2節で論じるように、内の関係にある連体節が主名詞と結ぶ意味関係が関与しているものと思われる。

次に、内の関係にある準体法同格節において「妻なき人のよろしきはいづこに」（宇津保1-213）、「いにしへの人のよしあるにて」（源氏1-94）のような形容詞や非対格自動詞のA類が占める比率がB類より極めて高く観察されるという特徴が挙げられる。先述のように石垣（1955）において同格節（「形状性名詞句」）は節内部の述語用言に「状態性」を帯びる語が来るとされる。本稿の調査からも、結論的には石垣の論と同様のことがいえそうである。しかし、表1、表2でみるように、同格節内の述語はまず、優先的に語そのものに状態性を含む形容詞、非対格自動詞が集中して分布していることがわかる。この現象にも3.2節でみる連体構造における意味役割の側面が関与しているものと思われる。

表1 語のタイプによる分布

	連体節		準体節 ⁸⁾	
	内の関係	外の関係	内の関係	外の関係
形容詞	7	43	40	50
非対格自	27	97	53	104
移動動詞	6	15	1	28
非能格自	7	8	2	18
他動詞	81	52	10	82
感情感覚	20	17	5	22
合計	148	232	111	304

表2 動作主の有無による分布

	連体節		準体節	
	内の関係	外の関係	内の関係	外の関係
A類	34	140	93	154
B類	94	75	13	128

3.1.2 助動詞別分布

次に用言に助動詞が接続している場合の助動詞別の使用についてみる。動詞に複数の助動詞が接続する場合も多いが、論が煩雑になるのを避けるため、最文末のもののみを扱う。表3は、述語に助動詞が接続している場合の分布を示したものである。なお、連体節と準体節を合わせて総数3例以下のものは、その他としてすべてまとめた⁹⁾。

助動詞が接続している場合の全体的な合計は、①タリ②ム③キ④ズ⑤リ⑥ケリ⑦ベシ⑧ツ⑨マス⑩ラム⑪ヌ、ケム⑫自発ルの順に高い。細部の順序は各節別に多少前後するが、これらを以下のA・B・Cの意味類

型として序列化して示すと、節の種類に関わりなく、 $A > B > C$ の順で接続率が高い。

- A. 過去・完了 (タリ、リ、キ、ケリ、ツ、ヌ)
- B. 推量 (ム、ラム、ケム、ベシ)
- C. 否定 (ズ)

また全体的にみて、連体節、準体節共に外の関係にある場合が内の関係より助動詞形式が多様である¹⁰⁾。状態性と関連する点では、二つの特徴がいえる。まず、過去・完了形式のツ、ヌについてである。過去・完了形式の中で、タリ、リ、キ、ケリは内の関係と外の関係に関わりなく分布している。しかし、ツとヌは、連体節、準体節共に外の関係の方に用例が集中している。ツは比較的近い過去の出来事を表す完成相の形式として「このすき者のしいでつるわざ」(源氏1-227)、「御格子の鳴りつるを、なぞと見む」(落窪101)のように動作の終了そのものに焦点があり、ヌは「人の帰りたまふべきほどの近うなりぬるを」(宇津保1-412)、「心ざしのむなしうなりぬるこそいみじけれ」(宇津保1-461)のように変化の実現を表し、変化そのものに焦点があるとされる(鈴木1992)。一方、タリ、リ、ケリは、一種の状態化標識といえるアリが介在したものであり¹¹⁾、直接経験を表すとされるキは、ツとヌのような動作の終了と変化そのものに焦点があるものとはいえない。したがって、状態性という側面から考えた場合、ツとヌは他の過去・完了形式と比べて結果継続に注目しにくい性質を持つ形式と考えられ、ツ、ヌが外の関係に集中するのは、内の関係が状態性と対立するツ、ヌが持つ性質をある程度跳ね除け

表3 助動詞別分布

	連体節		準体節		合計
	内	外	内	外	
タリ	14	14	34	26	88
リ	12	5	5	13	35
キ	23	16	4	19	62
ケリ	6	6	7	13	32
ツ	2	6	0	5	13
ヌ	0	2	0	4	6
ム	15	28	6	37	86
ラム	3	0	0	4	7
ケム	1	3	0	2	6
ベシ	7	4	1	5	17
ズ	11	12	5	10	38
マス	2	2	1	4	9
ル(自発)	0	0	1	3	4
その他	2	6	1	15	24
合計	98	104	65	160	427

ているためではないかと考えられる。

次に、表3では準体法同格節で他の節と異なる顕著な特徴が観察される。すなわち、助動詞の接続している全用例の中で、「その国より入れたる箱の唐めいたるを」(源氏1-295)、「いとおもしろき梅のありけるを折りて」(落窪246)、「武士の残れるは、朝廷の使の捕らへに来る」(宇津保1-85)のようなA類の過去・完了を表す形式が接続する割合が77%で非常に高く観察される(cf. 連体節内の関係58%、連体節外の関係47%、準体内容節50%)。特に過去・完了系の形式の中でも、表3でみるように結果の存在を表すタリ形式が接続している用例が突出して多い。

3.2 連体構造における意味役割分担

前節では主格助詞「の」が用いられる連体節と準体節の用例を節内の述語部に注目して考察した。本節では、述語部の性質と関連させながら、連体節と準体節の修飾部が主名詞と結ぶ意味関係について考察する。

まず、内の関係にある連体節、準体節についてみる。前節でみたように、内の関係にある準体法同格節の場合、まず優先的に状态的意味を含む形容詞や非対格自動詞が集中して分布し、また、接続する助動詞にはタリ形式が際立って多い傾向が観察される。なぜこのような現象がみられるのかを考えるに際して、影山(1999)の語彙概念構造がわかりやすいので、これによって形容詞、非対格自動詞の意味構造を示すと¹²⁾、

(9) 形容詞 布が太し y BE AT-z

(10) 非対格自動詞 布がわわく BECOME [y BE AT-z]

(y 対象物(布)、z どのような状態)

のようになる。形容詞と非対格自動詞は動作主を項として持たず、例(9)(10)のように状態[y BE AT-z]を共通の意味として持っている。非対格自動詞は変化[BECOME]の意味を持っているが、変化が終了した後の結果状態になると、状態[y BE AT-z]だけが焦点化する。変化の結果状態は、過去・完了を表す助動詞の接続によって表示される。特に、同格節は非対格自動詞全53例中30例が「白き扇のいたうこがしたるを」(源氏1-211)、「橋の木の埋もれたる、御隨身召して払はせたまふ」(源氏1-369)、「みちのくの紙の厚肥えたるに、匂ひばかりは深うしめたまへり」(源氏1-372)、「常夏のはなやかに吹き出でたるを、折らせたまひて」(源氏1-402)のように助動詞タリが接続している。タリは結果の存在を表すことに力点があった助動詞で(鈴木1992)、タリが接続することによって非対格自動詞が持つ変化は既に終了し、その結果状態[y BE AT-z]を静止画像のように表示している。また、非対格自動詞の残り23例は、アリ、ハベリ等の存在動詞、リ、ケリ、否定形が接続している例等で、状態性のものが大半を占めている。述

語が形容詞の例と合わせると、同格節の述語部は意味上の主名詞である主語名詞の状態や属性を表し、主語名詞は状態や属性が帰属する対象という意味関係を成す場合が多い。前節でみたように、非対格自動詞を含めた同格節全体においても過去・完了助動詞形式の接続率が高いのは、このような主語名詞との状態的な関係のためであろう。同格節の連体形がヒトやモノの意味になるのは、ヒトやモノが、具体的な存在として感知でき、属性や状態が帰属する対象になりやすいためであろうと思われる。

また、同格節の主語は「象は鼻が長い」に代表されるいわゆる総主構文あるいは多重主格構文における総主の性格を持つものが多い。総主構文との関連から同格節を観察すると、意味的なパターンとして概略次の三種に分けることができる。

【 α 】【X1 の X2 Y】——総主 X1 と部分主語 X2 が共に顕在。

〈赤い紙の色深き、心にもあらぬ人のかたち醜き、人の髪ところどころ白けたる、いとらうたしげならむ人のつつましきことなからむ、臨時のもてあそび物のその物と跡も定まらぬ〉

【 β 】【X1 の (X2) Y】——総主 X1 のみが顕在。部分主語 X2 は文脈で判断。

〈童の(顔、かたち)をかしげなる、松の(枝)露に濡れたる、白銀黄金の蓮の(花)開けたる、柳の(枝)萌え出でたりける〉

【 γ 】【X1 の Y】——部分主語 X2 が想定されない。

〈女房の下らん、下人の病しける、武士の残れる、継ぎの布のわわけたる、親兄弟のもてあつかひ恨むる〉

(X1 総主、X2 部分主語、Y 節内の述語)

【 α 】は「その赤い紙は色が深い」「その心にもない人は顔が醜い」のように総主と部分主語が共に記され、総主構文の連体構造としての性格が濃厚に現れている。【 β 】は「その女の子は(顔が)綺麗である」「その松の木は(枝が)露に濡れている」「その白銀黄金の蓮は(花が)開いている」と取替えて部分主格を言わなくても文脈で自然に了解されるものである。【 α 】と【 β 】は述語が形容詞・非対格自動詞の場合に多い。また、理論的には「色の深い赤い紙」「顔の醜いその人」「顔のきれいな女の子」「枝の濡れた松の木」のように対応する連体節の表現を持つことができる。【 γ 】は部分主語が想定されないものであるが、「女房の下らん」が「女房で、下向する人」のように解釈されるように、X1の「女房」が述語Yの「下向する」で述べられる事態が存在する全体の範囲を示している点で、総主と似通った意味的類似点を持つと考えられる。

一方、内の関係にある連体節の主名詞との意味関係は、例(11)のように修飾部と主名詞が状態・属性とその持ち主の関係を表す場合(35例)と、例(12)のようなそれ以外の場合(113例)を一つにまとめて考えることができる。例(12)のような用例は、修

飾部が主名詞に付属する状態や属性を表すというより、節内の述語が「言ふ」「しろしめす」「奉る」「着る」のような動作性を持つ出来事を表し、主名詞は出来事を構成する格成分となるものである。修飾部が状態や属性を表す関係は、動作主を持たず状態性を持つ形容詞、非対格自動詞の例にほぼ対応し、その他の場合は形容詞、非対格自動詞以外の用例にほぼ対応する¹³⁾。

- (11) a. 月のおもしろき夜、今宮、あて宮、簾のもとに出でたまひて、(宇津保1-502)
 b. 霧のいと深き朝、いたくそそのかされたまひて、(源氏1-221)
 c. かぐや姫の在る所にいたりて、(竹取96)
 d. 木の芽のはる春日の宮に渡りたまへり。(宇津保1-261)
- (12) a. 人の言ふこと¹⁴⁾は強うもいなびぬ御ころにて、(源氏1-355)
 b. この殿は、殿のしろしめすべき所なるを、(落窪277)
 c. この子の着たるもの、あの殿より賜はる。(落窪381)
 d. 人の奉れる御衣一具、葡萄染の織物の御衣、(源氏1-375)

ところで、内の関係にある連体節の修飾部が主名詞の状態や属性を表す例には、主名詞が例(11) a、bのように時間を表す場合と、例(11) c、dのように場所を表す用例で占められているという特異な現象が観察される。現代語の連体節では「髪の高い女」「芯の切れたシャープ」のように、主名詞がヒトやモノで(女、シャープ)、それに付属する属性や状態を連体修飾部が表すことができる。しかし、注目されるのは、中古語の内の関係にある連体節はほぼ例(11) a、b、c、dのように主名詞が修飾部で述べられる事柄が存在する時や場所を表す例で占められ、ヒトかモノとして解釈される例は「人の見及ばぬ蓬萊の山」(源氏1-145)の一例のみが観察される。また、そもそも連体節の中で状態性を持つ形容詞や非対格自動詞は前節の表1でみるように、「夕月夜のをかしきほどに」(源氏1-102)、「花の散らぬ前に」(宇津保1-283)のような外の関係の修飾構造に圧倒的に多い。なぜ、このような現象が起こるのだろうか。その理由としては、ヒト・モノの属性を表す連体構造は準体法同格節の意味領域であり、連体節とは連体構造の中でその意味機能が重ならないように成立している、ということが考えられる。互いに連体構造を成しながら、連体節と準体節とで意味役割分担が行われていたと考えられる。上述の現代語の用例は中古語では、おそらく「女の髪長き」「シャープの芯切れたる」のように準体法同格節で表現される可能性がある。また、内の関係にある連体節の修飾部が例(12)のように動的な動作を表す場合、例(12) a、b、cのように、主名詞が「こと」や「ところ」「もの」である例が全113例中69例(61%)で比較的多く見られるという特徴も見られる。しかし、これら以外にも、例(12) dのような具象物を表す主名詞の例も存在する(26例23%)。

次に、外の関係にある連体構造について簡略にみる。まず、準体法内容節は例(13) a、bのように現代語では節全体の名詞化標識として準体助詞ノやコトの挿入が想定される。一方、外の関係にある連体節は例(14) a、b、c、d、eのように主名詞が修飾部に対する時間、様子、方向、「こと」、「まま」の例が全232例中178例(77%)を占め、他に「ところ、かぎり、なごり、心地、なか、例、わざ、ばかり」等があり、現代語でいう所謂形式名詞類が接続し、修飾部で示される事態が成立する時間や様子、方向等の範疇を示す¹⁵⁾。

- (13) a. 継母の憎むは例のことに人も語る類ありて聞く。(落窪167)
 b. それだに人のあまた知らむはいかがあらん、(源氏1-176)
- (14) a. 御使の行きかふほどもなきに、(源氏1-99)
 b. くらつまるの申すように尾浮けてめぐるに、(竹取85)
 c. その織女の裁ち縫ふ方をのどめて、長き契りにぞあえまし。(源氏1-152)
 d. その子、心のさときことかぎりなし(宇津保1-19)
 e. 日の経るままに、尊さまされば、(落窪318)

以上の連体構造の中で準体節と連体節が主名詞と成す意味役割を中心に、その分布傾向を整理すると、表4のようになる。

表4 連体構造における連体節と準体節の分布

主名詞の意味役割	内の関係		外の関係		
	属性・状態主		出来事の格成分	節の範疇	(補文)
主名詞の種類	ヒト・モノ	場所・時間	種々	形式名詞類	(ノ、コト)
該当節	同格節	連体節	連体節	連体節	内容節

4. 現代語との比較

現代語の連体構造は準体法が消滅し、主名詞が存在する連体構造のみが存在する。準体法全般に関しては例えば、「行くを拒む」から「行くノを拒む」のように準体助詞ノの発達による役割移転があったことは、既に信太(1976, 2006)をはじめとした諸氏に詳細な研究がある¹⁶⁾。「の」が用いられる連体節は、現代語ではどのような変化を遂げているのだろうか。

金(2007)では、「髪の長い女」「頬骨のそげた男」のような「の」が用いられる現代語の連体節を「髪が長い女」「頬骨がそげた男」のような「が」が用いられる用例と比較し、次のような傾向を観察した。①「の」が用いられる連体節内の述語は形容詞や非対格自動詞のような状態性を持つ述語(無行為・無変化・無時間的展開)が多い。②「の」

は連体節の述語連体形が状態性を持ち、脱テンス・アスペクト化するにつれ使用頻度が高くなり、「頬骨の突き出た顔」「風の吹く坂道」のような動詞連体形特有の用法を示すタ形、ル形との親和性が強い¹⁷⁾。③連体節内の主語部と述語部との間の介在要素が殆ど見られず、述定が主語と述語が直接接した統語構造との親和性が強い。④主名詞が形式名詞類の場合は使用頻度が低く、主名詞の表示する意味の実質性が強い。また、意味的な特徴として、例(15)～(17)に見るように主名詞がヒトやモノ、場所を表す例が多く、主名詞と連体節はほとんど「内の関係」の連体構造を成している。

(15) 顔色の悪い女 : 主名詞が「ヒト」

(16) 油のにじんだ白衣 : 主名詞が「モノ」

(17) 灯のうるむセーヌ河 : 主名詞が「場所」

このような観察から「の」は、連体修飾部が主名詞の状態・属性であることを示し、述語が状態性述語として用いられていることを示すものと結論づけた。さらにこのような特徴を見せるのは、「の」が述語連体形の名詞のような性質に係ろうとするために生じるものであると論じ、「の」は述定の構造で表れるが、その内実は述語連体形と装定の関係を成していると結論づけた。現代語で観察した傾向をかい摘んで要約し、3節で考察した中古語に見られる傾向と比較すると、表5のようになる。

表5 「の」連体節の変化

	中古語	現代語 ¹⁸⁾
連体構造	内の関係 (39%) < 外の関係 (61%)	内の関係 (95%) > 外の関係 (5%)
述語のタイプ	種々 (内: 他動詞が55% 外: 非対格自動詞が42%)	形容詞、非対格自動詞に集中
助動詞の形式	過去・完了 > 推量 > 否定 (特定の形態に集中しない)	脱テンス・アスペクト形式 (特にタ形との親和性が強い)
主名詞の役割	内: 属性・状態主、格成分要素 外: 修飾部が所属する範疇	属性・状態主関係に集中
主名詞の種類	内: 時間・場所、種々 外: 形式名詞類	ヒト・モノ・場所名詞に集中

(※「の」連体節: 「の」が用いられる連体節、内: 内の関係、外: 外の関係)

表5をみると、現代語の「の」が用いられる連体節の特徴は、中古語のそれに比べると、連体構造や述語のタイプ、主名詞の役割等において顕著な変化が見られる。特に、連体構造に注目すると、中古語では外の関係が内の関係より多かったのが、現代語では内の関係が外の関係を大きく圧倒している。また、現代語は、述語の種類が状態性を持つ形容詞や非対格自動詞という特定の語類に集中しているし、助動詞の形式においても

特にタ形と親和する傾向は中古語においては見られないものである。また、主名詞との関係から、現代語の「の」が用いられる連体節は中古語では連体節の意味領域ではなかったヒトやモノの属性を表す関係を獲得し、主名詞が属性・状態の持ち主であることを示す用法に特化してきていることがわかる。つまり、「の」は日本語の主語表示の助詞としての地位を「が」によって侵食されながら、「の」が受け持っていた意味役割が単純に衰退したというようなものではなく、新たな機能を獲得してきたことが窺える。「の」が獲得した意味領域は中古語では準体法同格節で表していたヒトやモノの属性を表す関係である。中古語における準体法同格節と「の」が用いられる現代語の連体節に見られる傾向を表5と対応させて示すと、表6のようになる。

表6 中古語同格節と現代語「の」連体節の比較

	中古語同格節	現代語「の」連体節
連体構造	内の関係	内の関係 (95%) > 外の関係 (5%)
述語のタイプ	形容詞、非対格自動詞に集中	形容詞、非対格自動詞に集中
助動詞の形式	状態性 (タリ形が集中)	脱テンス・アスペクト (タ形と親和)
主名詞の役割	属性・状態関係	属性・状態関係
主名詞の種類	ヒト・モノ	ヒト・モノ・場所名詞に集中

表6でみるように中古語における準体法同格節は、「の」が用いられる現代語の連体節と近似した特徴を示している。表6に見られる対応関係から、筆者は「の」が用いられる現代語の連体節は、準体法同格節が日本語の歴史から消え去ると共に同格節が果たしていた意味役割の一部を担ってきている可能性があるのではないかと考える。準体法全般に関しては、前述のように準体助詞ノの介入による役割移転が知られている。準体法同格節は、従来の研究では内容節と同様、いわゆる準体助詞ノを挿入する形で発展してきたと考えるのが一般的なようである¹⁹⁾。湯沢 (1940、1953) でいう特別な連体修飾語はこれを指し、湯沢は例 (18)、(19)、(20) のような現代語の表現を、中古語の同格節に相当すると考えている。

(18) 「松の葉の枯れ落ちたノ」をもやした。

(19) 「針のおれそうなノ」でやっと縫った。

(20) 「柿の熟したノ」

(湯沢 (1940、1953) 所収)

確かに準体法全体の観点からすると、同格節や内容節が互いに違う方向に発展したと考えるより、同じく準体助詞ノを添加させることによって、準体法の役割を引き継いだと考えるのはシンプルでわかりやすい。しかし、同格節の場合、この考え方にはいくつかの問題点がある。まず、同格節は連体構造の中ではヒトやモノの属性や状態を表す役

割を果たしており、これは連体修飾が有する重要な機能の一つであるのに対して、例(18)、(19)、(20)のような主述の意味関係を維持しながらノを添加する言い方は、現代語の実際の言語生活にはさほど出現しない問題がある²⁰⁾。例えば、例(20)のような表現は、現実的には「熟した柿」のような連体修飾表現で現れることが多いだろう。次に、同格節は連体形がヒトやモノという意味を包含しているものであるが、準体助詞ノを添加させる言い方は、例(18)、(19)、(20)のように主名詞がモノである場合はともかく、主名詞がヒトの場合は想定しにくい点である。例えば、「母なき男子のかたち心すぐれたる」(宇津保1-539)、「童のをかしげなる」(源氏1-211)という同格節を現代語で「男の格好いいノが」「女のきれいなノが」と準体助詞ノを添加して表す言い方は、ぞんざいな言い方を除いて一般的には想定しにくい。準体助詞ノはそもそもモノが縮約を起こしてノに変化したと考える説もあり(濱田1970)、人を表す場合は適用しにくい側面があると思われる²¹⁾。最後に、準体法そのものがどのように変わっていったのかということと、準体法が受け持っていた連体修飾機能は何によって引き継がれたかということは分けて考える必要があるという点である。すなわち、「柿の熟したる」という同格節の表現が「柿の熟したノ」のように準体助詞ノを添加させ、元の同格節を忠実に複製している表現に変化したと考えるのは、準体法そのものの変化を説明するものではある。しかしながら、「柿の熟したノ」のような表現が現実の言語生活にさほど出現しないことを考えると、同格節の表現が受け持っていた機能がただちに準体助詞ノを添加する語法によって引き継がれたとは考えにくい。従来の研究においては、準体法そのものの変化に焦点が置かれていたが、連体構造全体の中の機能という所に焦点を当てると、準体法は必ずしも準体法を忠実に再現している語法に引き継がれなくてもよい。

表6でみるように、「の」が用いられる現代語の連体節は準体法同格節に近似した類似点を示している。まず、両者は共に述語に語彙概念として状態性を持つ形容詞・非対格自動詞の語類が多い。また、中古語の同格節は助動詞別の分布で検討したようにタリ形との親和性を示しているが、「の」が用いられる現代語の連体節も状態を表すタ形が集中して分布する特異な傾向を示している。金(2007)の調査では、現代語の連体節内の述語連体形が「頬骨の突き出た顔」「泥のこびりついた靴」のような状態を表すタ形の場合はほとんど「の」が用いられており²²⁾、形態的な特徴として、タ形との親和性が強いことを観察した。このタ形はタリが歴史的な過程を経て変化した形である(鈴木1993)。また、両者共に内の関係の連体構造で修飾部はヒトやモノの属性や状態を表す。ヒトやモノの属性を表す表現は中古語の連体節には見られないものである。また、前節で論じたように、同格節は総主構文の連体構造としての性格を少なからず有するものと考えられる。「赤い紙の色深き」「人の髪とところどころ白けたる」「童の(顔、かたち)をかしげなる」「松の(枝)露に濡れたる」「白銀黄金の蓮の(花)開けたる」のような二重主格構文を連体構造に納める方法は、現代語で「色の深い赤い紙」「髪の白い人」「枝

の濡れた松」「花の開けた蓮」のように連体節の表現になる。準体法同格節の意味構造は、連体節の統語構造になじみやすい特徴を持っていると考えられる²³⁾。

5. おわりに

本稿では、連体構造における主格助詞「の」の使用傾向がどのように変化してきているのか、中古語において主格助詞「の」が用いられる連体節と準体節の連体構造の傾向を観察し、現代語の「の」が用いられる連体節と比較した。結果、「の」が用いられる現代語の連体節は準体法同格節の役割を一部引き継いできている可能性がある、というのが現段階で本稿が到達した一応の見通しである。ただし、これは歴史的な検証を経なければならぬ問題であり、細部の検証は行われていない。ここでは、連体構造における主格助詞「の」の変化についての大まかなビジョンを示したつもりである。今後は、歴史を区切って細部の論証を行っていききたい。

注

- 1) 町田 (2007: 122)。
- 2) 大野 (1977, 1978) をはじめ「が」と「の」の歴史的展開を比較する論考は多いが、両者の比較と「の」自体の考察は分けて考える必要がある。本稿でみるように、「の」は自身の役割全体の体系の中で有機的に関連するものと考えられるが、この点に目を向けた論考は、管見の限り見当たらない。
- 3) 源氏物語・落窪物語・竹取物語——日本古典文学全集 (小学館)、宇津保物語——新編日本古典文学全集 (小学館) による。源氏物語と宇津保物語はそれぞれ第一巻のみを対象としている。
- 4) 本稿でいう同格節については、近藤 (2000) のように「主格ではなく属格 (連体格・所有格) の助詞であるとする」(341p) のが適切であるとする論もある。確かに、意味的には同格節内の述語句に対する主名詞が主語名詞である点では「属格助詞」の解釈が可能である。しかし、(7) a が意味的には「徳ある田舎の人」のような構造が可能であるにも関わらず、「田舎の人の徳ある」の配列として現れているという構文構造の違いを無視することはできない。同格節の配列の中では「の」で繋がれる名詞句と述語句に主述の関係が認められ、たとえ、同格節の「の」を属格助詞と見なしてもこのことには変わりがないと考えられる。
また、同格節は近藤 (2000) で示しているように、(7) a, b のような典型的なパターン (近藤 (2000) の分類では「同一名詞追加型」) 以外にも、「をかしき松に面白き藤のかかれるを、松の枝ながら折りて持てまして」(宇津保1-280) のような主名詞が連体部中にそのまま存在する「同一名詞残存型」(「面白き藤のかかれる松」と、「弁の殿の得たまへるは、三百石の物出で来なり。」(落窪352) のように連体部中に同一名詞も主名詞も現れず、文脈から推定するしかない「同一名詞消去型」(文脈上「弁の殿の得なされた荘園」と解釈される) がある。本稿の対象テキストにも「同一名詞残存型」(3例)、「同一名詞消去型」(7例) が見当たすが、用例数が少ない。本稿の対象は (7) a, b のような典型的な用例に限ることとする。
- 5) 対象テキストの中16例が見当たる。例えば、「おし折りたまひし桂の木の萌え出でたるを見て、「忘れじとちぎりし枝は萌えにけり頼めし人ぞこのめならまし」と思ひわたる。」(宇津保1-64) の下線部は「おし折りたまひし桂の木が萌え出ている様子」(外の関係) を見ているのか、「萌え出ている

る桂の木」(内の関係)を見ているのか、判別しにくい。このような例については小田(1991)に詳しく、これを参考にした。

- 6) 「あはれなり」「をかしげなり」のようなナリ活用(33例)形容動詞類も形容詞としてカウントする。
- 7) 対象物の変化は、自動詞(特に非対格自動詞)では主語に当たり、主語の変化ということになる。
- 8) 準体節の「内の関係」は同格節、「外の関係」は内容節を指す(以下同様)。
- 9) 計24例で、マジキ、変化ナル、メリ、伝聞ナリ(各3例)、オハス、推量ナム(各2例)、係助詞ナム、推量ナリ、使役ス、断定ナリ、トアル、尊敬シム、ナメリ、ハベリ(各1例)である。
- 10) 外の関係にある準体法内容節には、表3の「その他」の合計24例中15例が分布し、助動詞接続の種類が最も多様である。この中には、他の節にみられないメル、トアル、ナリ(断定)、ナリ(推量)、シム、ナメリ等の形式が含まれる。
- 11) 釘貫(2003)では、奈良時代語のリ・タリ・ナリ形式が連体修飾の用例に密集することを観察し、リ・タリ・ナリが述語の意味を状態表示する形容詞的用法として成立したものであると論じている。
- 12) 影山(1999)の語彙概念構造は、動詞として言語化する際に統語的に意義のある意味特性の型(状態、変化、活動等)を示したもので、動詞相互の意味特性の関連が捉えやすい。例(9)(10)のBEは「状態」、BECOMEは「変化」を表す意味述語である。Y、Zは変項で、実際の例では具体的な名詞に対応する。
- 13) 中には「人の忌ましむる五月」(宇津保1-195)のように他動詞で修飾部が主名詞の属性を示す例が少数存在するが、全体的な意味関係の対応に大きなずれはない。
- 14) 主名詞が「こと」のような語は、「人の言ふこと」のような実質名詞の意味をもつ場合は(人がその事をいふ)内の関係の修飾関係で、「さま容貌などのめでたかりしこと」(源氏1-101)のような「こと」を修飾部の構成要素として還元できない場合が外の関係になる(寺村1975-1978参照)。
- 15) 形式名詞に、先行する語句の内容の範疇を規定する機能があるとする井手(1967)の論を参考にした。なお、外の関係の連体構造については、青木(2005)でコトを主名詞とする連体節が準体節とは主節の述語との関連で統語的に異なった振る舞いを示していると論じているように、複文を視野に入れた考察が必要である。本稿では、この問題には立ち入らず、簡略な整理にとどめる。
- 16) 吉川(1950)、信太(1976、2006)、原田(1978)、柳田(1993)、山口(1993)、青木(2005)等。
- 17) 「風の吹く坂道」「頬骨の突き出た顔」は述定では「その坂道には風が吹いている」「その顔が頬骨が突き出ている」のように「～ている」の形で表われ、連体形と終止形の形式が異なり、動詞連体形特有の用法である(高橋1994)。
- 18) 金(2007)のデータに基づく。金(2007)のデータは1970～1990年代の現代語小説4冊(五木寛之『白夜草紙』(1971、文芸春秋)、宮本輝『星々の悲しみ』(1984、文春文庫)、連城三紀彦『恋文』(1987、新潮社)、遠藤周作『深い河』(1996、講談社)から主格助詞「の」「が」が用いられる連体節の用例を抽出している(「の」562例、「が」581例)。「の」は全562例中533例(95%)が内の関係、29例(5%)が外の関係である。
- 19) 従来の研究(注16)では、同格節も準体法全体の推移の中で論じられている。湯沢(1940、1953)では同格節と現代語の語法に特に注目している。
- 20) 表1の合計でみるように、中古語の連体構造における同格節の使用頻度は決して低いものではない。しかし、現代語で例(18)～(20)のような表現は、連城三紀彦『恋文』(1984、新潮社、全227ページ)を例にすると小説全体でまったく用例が見当たらない。
- 21) 歴史的展開の中で助詞「が」と「の」が受ける体言には待遇性の違いがあり、尊敬の対象は「の」、非尊敬の対象は「が」で受ける傾向にあったことが言われている(風間1970、安田1977、大野1977、1978等)。「男の格好いいが」「女のきれいなが」のように「の」が受ける主語名詞がぞんざいな表現になる場合、主格助詞「の」の性質と互いに反発しあうだろうと思われる。
- 22) 注18参照。タ形は全98例中89例(91%)に「の」が用いられている。

23) 部分主語が想定されない同格節の場合においても、例(20)のような表現がさほど使用されないことから、通常の連体構造への移行があったのではないかと予想される。

参考文献

- 青木博史 (2005) 「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』1-3.
- 青木伶子 (1952) 「奈良時代における連体助詞『が』『の』の差異について」『国語と国文学』.
- 青木伶子 (1956) 「書評石垣謙二著『助詞の歴史的研究』」『国語と国文学』.
- 石垣謙二 (1942) 「作用性用言反撥の法則」『国語と国文学』(『助詞の歴史的研究』1955、岩波書店所収)
- 井手至 (1967) 「形式名詞とは何か」『講座日本語の文法3』明治書院.
- 大野晋 (1977) 「主格助詞ガの成立」『文学』7 岩波書店.
- 大野晋 (1978) 『日本語の文法を考える』岩波書店.
- 小田勝 (1991) 「所謂「同格」の表現価値について」『国語研究』55.
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版.
- 影山太郎 (編) (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店.
- 風間力三 (1970) 「「が」「の」の変遷」『月刊文法』2-9.
- 金銀珠 (2007) 「連体修飾の研究——記述と学説史——」平成18年度名古屋大学文学研究科提出博士学位論文.
- 釘貫亨 (2003) 「奈良時代語の述語状態化標識として成立したり、タリ、ナリ」『国語学』54-4.
- 黒田成幸 (1998) 「主部内在関係節」『言語の内在と外在』東北大学文学部.
- 此島正年 (1959) 「古代における主格助詞「が」「の」」『弘前大学人文社会』16.
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房.
- 重見一行 (1994) 『助詞の構文機能研究』和泉書院.
- 信太知子 (1976) 「準体助詞「の」の活用語承接について——連体形準体法の消滅との関連——」『立正女子大國文』5.
- 信太信子 (2006) 「衰退期の連体形準体法と準体助詞「の」——句構造の観点から——」『神女大國文』17.
- 鈴木泰 (1992) 『古代日本語動詞のテンス・アスペクト——源氏物語の分析——』ひつじ書房.
- 鈴木泰 (1993) 「時間表現の変遷」『言語』22-2.
- 高橋太郎 (1994) 『動詞の研究』むぎ書房.
- 寺村秀夫 (1975-1978) 「連体修飾のシンタクスと意味——その1～その4——」『日本語・日本文化』4号～7号 大阪外国語大学留学生別科.
- 濱田敦 (1970) 『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店.
- 町田健 (2007) 「言語テキストの構造と生成」『総合テキスト科学の地平』名古屋大学大学院文学研究科.
- 原田裕 (1978) 「連体形準体法の実態——近世後期資料の場合——」『春日和男教授退官記念語文論叢』.
- 安田章 (1977) 「助詞(2)」『岩波講座日本語7 文法II』岩波書店.
- 柳田征司 (1993) 「無名詞体言句から準体助詞体言句(「白く咲けるを」から「白く咲いているのを」)への変化」『愛媛大学教育学部紀要第II部人文・社会科学』25-2.
- 山口堯二 (1992) 「古代語の準体句構造」『国語国文』61-5.
- 山口堯二 (1993) 「準体法の推移と準体助詞ノの形成」『大阪大学教養部研究集録(人文・社会科学)』41.
- 吉川泰雄 (1950) 「形式名詞「の」の成立」『日本文学教室』3.
- 湯沢幸吉郎 (1929) 「「の」「が」が伴う句の一形式——修飾法の一——」『国語教育』2月(『国語学論考』1940、八雲書林所収)
- 湯沢幸吉郎 (1953) 『口語法精説』明治書院.